

PA-4

助数詞<つ>または<個>を用いて数えられている対象の特徴に関する分析 - 『日本語日常会話コーパス』を使用した実態調査-

山本晃子（立命館大学大学院博士課程）

要旨

本研究では、『日本語日常会話コーパス』（Corpus of Everyday Japanese Conversation, 以下 CEJC）から日本語の助数詞<つ><個>の用例を収集し、それぞれの助数詞を用いて数えられている対象（以下 対象名詞）に注目し、量的な観点から比較、分析を行った。分析には『分類語彙表-増補改訂版-』（国立国語研究所 2004, 以下『分類語彙表』）を用いた。分析の結果、<つ>の対象名詞は『分類語彙表』の部門のうち「抽象的關係」から「自然物および自然現象」までの幅広い領域に分類される一方、<個>の対象名詞は主に「生産物および用具」「自然物および自然現象」に分類され、日常会話において<つ>は、抽象物から具体物まで幅広い対象に用いられるが、<個>の使用は、具体物に偏ることが示された。また、年齢や学年の差を表す「兄は私の二個上だ」のような用法が、<個>の主要な用法の一つとして定着していることも示された。

1. はじめに

日本語の助数詞<つ><個>はどちらも、無生物を数える際に広く使用されており、その使用範囲は(1)のように重なる部分も多い。

- (1) 机の上に { りんご・消しゴム・かばん } が { 一つ・一個 } ある。 (作例)

また、<個>は、書き言葉よりも話し言葉のほうがその使用範囲が広いと考えられる。例えば(2)に示すように、「質問」のような抽象物が<個>を用いて数えられる例は、書き言葉よりも話し言葉で多く見られると考えられる。

- (2) ちょっと質問を一個飛ばして、次を伺います。

(国会会議録第 210 回国会衆議院文部科学委員会第 3 号 2022 年 11 月 9 日¹)

本研究では話し言葉における<つ><個>の使用実態を調査し、それぞれの助数詞の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

書き言葉の中でも新聞記事から用例を収集し、<つ><個>それぞれの助数詞の対象名詞に注目する形で両者を比較した研究として、飯田（1999）、陶（2009）が挙げられる。この二つの研究では、<つ>の対象名詞は抽象物に偏り、<個>の対象名詞は具体物に偏ることが示されている。

¹ 第 210 回国会衆議院文部科学委員会（2022 年 11 月 9 日）

<https://kokkai.ndl.go.jp/#/detail?minId=121005124X00320221109¤t=17> [2023 年 10 月アクセス]

一方、話し言葉については、アメリカ在住の 10 人の日本語母語話者の日常会話の用例を分析した Shimojo (1997) や、国会会議録から用例を収集し、分析した伊藤 (2015) が挙げられるが、この二つの研究では、〈個〉の使用は具体物に限らず、〈つ〉と同様に抽象物にも用いられることが指摘されている。また、伊藤 (2015) では、1800 年代後半から 1940 年代までの新聞記事の用例も分析されており、分析の結果、1950 年代以降の新聞記事では〈個〉を用いて抽象物を数える用例が大幅に減少していることから「新聞で〈個〉の使用範囲が縮小したのは新聞の事情によるものではないか」(伊藤 2015: 74) と述べている。

このように、〈つ〉〈個〉の使用は、新聞記事のような書き言葉と、話し言葉においては異なる特徴を示すと考えられる。しかし、話し言葉の用例を収集し、〈つ〉〈個〉の使用を分析した研究は、筆者の知る限り、Shimojo (1997)、伊藤 (2015) 以外には存在しない。また、この二つの研究では、〈個〉が抽象物に用いられる例を列挙してはいるが、飯田 (1999)、陶 (2009) のように、〈つ〉の使用と比較した際、量的な観点からはどのような傾向を示すのかについては言及されていない。

そこで本研究では、話し言葉における〈つ〉〈個〉の用例を収集し、両者の使用を量的な観点から比較、分析することを試みる。

3. 研究方法

本研究では、日常生活の様々な場面で生じた自然会話が収録されているコーパスである CEJC を対象に、〈つ〉〈個〉の用例の収集を行った。用例収集には、オンライン検索ツール『中納言』を利用した²。〈つ〉については、キーに「品詞-中分類-数詞」、後方共起条件に「語彙素-つ」を設定し、〈個〉については、キーに「品詞-中分類-数詞」、後方共起条件に「語彙素-個」を設定し、検索を行った。

用例のうち、分析対象としたのは、〈つ〉または〈個〉が、数詞二から九と共起する例(二つ〜九つ、二個〜九個)である。十以上の数詞を分析対象外としたのは、〈つ〉がこれらの数詞とは共起できず、〈個〉との比較ができないためである。また、一については、対象を数える以外の特殊な用法が多く存在し、分析に入る前に更なる検討が必要であると考えたため、今回は分析の対象外とした³。

収集した用例は、前後文脈や CEJC に収録されている会話中の動画を確認し、それぞれの用例について対象名詞を確認した。その際、「三つ折り」や「四つ星ホテル」のような慣用句、「アンパン一つ豆三つ」のような歌詞、本からの引用は分析の対象外とした⁴。また、(3) (4) のように、前後文脈からも動画からも対象名詞が確認できない用例についても、同じく分析の対象外とした⁵。(3) は、

² 『中納言』のバージョンは 2.7.2、CEJC のデータバージョンは 2023.03 である。

³ 数詞一と共起する場合の特殊な用法と考えられるものとしては、「チームの心が一つになった。」「嫌味や文句の一つでも言ってやりたい。」などが挙げられる。

⁴ 引用には、以下のような太宰治の作品からの引用と考えられる例があった。

(i) 彩香、選ばれし者の恍惚と不安 我 三つあり。あれ? 三つ我ありだっけな。(T008_009)

⁵ 用例文末の括弧内には、CEJC に収録されたデータに付与されている会話 ID を示した。話者名は CEJC 内でそれぞれの話者に割り当てられている仮名である。また、CEJC に収録されている会話を書き起こした転記テキストには、笑い声やフィラーなどを示す特殊なタグが含まれているが、本研究では「疑問型上昇調」を

会話参加者全員がよく知る店とその商品と考えられるものが話題に上がっているが、前後文脈からは対象名詞が確認できなかった例、また、(4)については、その場にある何らかの対象を「二つ」で示しているが、動画には手元が映っていないため、対象名詞が確認できなかった例である。

- (3) つや子, だって あたしたちグループ朝一メンバー六人いるから 六個分買うね。
紀世子, 六個か。

(K009_016a)

- (4) 広瀬, この下 二つだよ。 (T009_008a)

これらの例を除く<つ>635例、<個>265例の対象名詞について『分類語彙表』を用いて意味分類と分析を行った⁶。

4 分析

4.1 分類語彙表-部門による比較

3節に示した方法で収集した用例の対象名詞を『分類語彙表』の部門によって分類した結果を次ページの表1, 図1, 図2に示す。なお、対象名詞のうち、『分類語彙表』に記載のないものについては分析から外している⁷。

<つ><個>のどちらもが、異なり語数、延べ語数ともに、「生産物および用具」が最も多い。<つ>は、それに次いで、異なり語数では「人間活動-精神および行為」, 「抽象的關係」(延べ語数では「抽象的關係」, 「人間活動-精神および行為」の順)が続き、その次の「自然物および自然現象」で異なり語数、延べ語数がともに大きく下がっている。

一方、<個>は、最も語数の多い「生産物および用具」に比べて、「抽象的關係」「人間活動-精神および行為」「自然物および自然現象」の異なり語数、延べ語数がともに3分の1以下になっており、「生産物および用具」の占める割合が大きいことがわかる。このことは図1, 図2のグラフからも明らかであり、<個>の対象名詞は、延べ語数、異なり語数ともに、「生産物および用具」の割合が全体の半数以上を占めている。

表す「?」以外は省略している。用例中に登場する個人名は、転記テキスト内の仮名をそのまま記している。用例中の下線は筆者による。

⁶ CEJC から収集された<つ>(二つ~九つ)の用例は全部で635例あり、そのうち分析対象外としたのは慣用句35例、歌詞6例、引用3例、対象名詞不明のもの31例である。<個>(二個~九個)の用例は全部で274例あり、そのうち分析対象外としたのは対象名詞不明のもの9例である。

⁷ 『分類語彙表』に記載のないものは、<つ>の対象名詞で「(パソコンの)モニター」「(ロケットの)ブースター」「(出し物の)ネタ」「コンセプト」「(パソコンの)サーバー」「タッパー」「お題」「アカウント」、その他に「つくね」や「渋皮煮」などの食べ物の異なり語数15、延べ語数35、<個>の対象名詞で「(アルファベットの)S」「フラックガーランド」「キット」「ポケモン」「スーパーボール」「六角形」、その他に「ラフテー」「サモサ」などの食べ物の異なり語数11、延べ語数20である。

表1 分類語彙表-部門による分類と語数

部門	つ		個	
	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数
生産物および用具	109	263	55	147
抽象的關係	43	158	13	34
人間活動-精神および行為	55	102	13	22
自然物および自然現象	21	50	13	39
人間活動の主体	14	27	3	3
合計	242	600	97	245

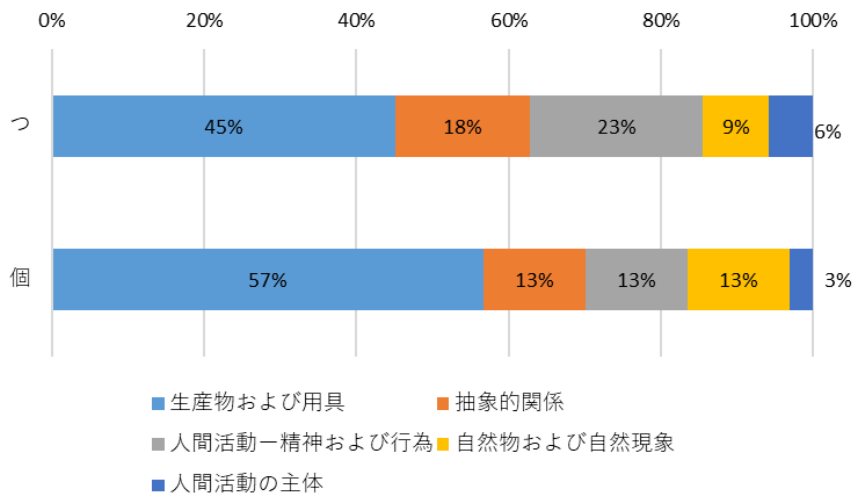


図1 (異なり語数) 分類語彙表-部門による分類と割合

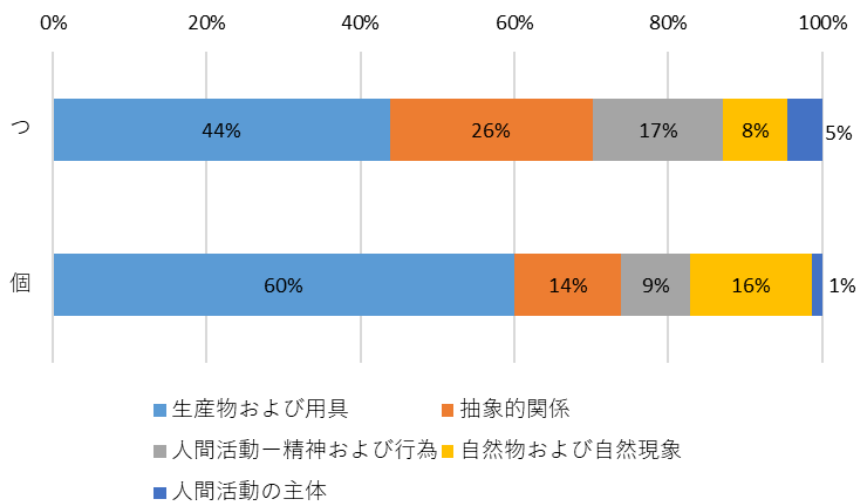


図2 (延べ語数) 分類語彙表-部門による分類と割合

4.2 分類語彙表-中項目による比較

次に、<つ><個>の対象名詞を『分類語彙表』の中項目によって分類した結果を次ページの表2に示す。

表2 分類語彙表-部門-中項目による分類と語数

部門	中項目	つ		個	
		名詞(延べ)	異なり	名詞(延べ)	異なり
抽象的関係	事柄	事(7)、候補(5)、物(3)、選択肢(3)、データ(2)、件(2)、事件(1)、事故(1)	8	事(3)、物(1)、例(1)	3
	類	差(66)、パターン(3)、目標(1)、条件(1)	4	差(11)	1
	様相	特性(2)、要素(1)	2	特性(1)、内容(1)	2
	作用	チャンネル(2)、転換(1)、壁(1)	3	ハードル(1)	1
	時間	日(2)、シーズン(1)	2		0
	空間	点(6)、席(4)、所(3)、サイト(2)、場所(1)、地区(1)、観光地(1)、曲線(1)、ポイント(1)	9	点(7)、所(1)、ページ(1)	3
	形	丸(3)、穴(2)、口(2)、三角形(1)、目盛り(1)、欄(1)	6	三角形(2)	1
	量	年齢(10)、階級(3)、グループ(3)、行(2)、数(1)、セット(1)、部分(1)、番号(1)、豊かさ(1)	9	桁(3)、数(1)	2
人間活動の主体	成員	業者(4)	1		0
	社会	駅(6)、バス停(4)、陣地(2)、教室(1)、工場(1)、寺(1)、就職先(1)、小学校(1)	8	会社(1)	1
	機関	生協(2)、朝廷(1)、派(1)、班(1)、チーム(1)	5	サークル(1)、チーム(1)	2
人間活動―精神および行為	心	テーマ(6)、アトラクション(5)、意味(4)、授業(3)、反応(2)、講習(2)、教科(1)、案(1)、計量(1)、方法(1) など	16	授業(3)、アトラクション(2)、意味(1)	3
	言語	刊行物(6)、単語(4)、課題(4)、答え(4)、問題(3)、キーワード(2)、信号(2)、言葉(2)、会議(1)、銘柄(1) など	22	文章(5)、項目(2)、評論(1)、助動詞(1)、メニュー(1)、リスト(1)	2
	芸術	絵(6)、映画(2)、作品(1)、写真(1)	4	曲(1)、作品(1)	2
	生活	ツアー(3)、仕事(1)、ヒット(1)	3	ツアー(2)	1
	行為	仕事(2)、部活(2)、担当(2)、資格(1)	4		0
	交わり	同窓会(2)	1		0
	待遇	賞(1)	1		0
	経済	株(1)、報酬(1)	2		0
	事業	塗り(1)、施術(1)	2	撮影(1)	1
	生産物および用具	物品	荷物(1)、チケット(1)、部品(1)	3	商品(3)、土産(2)
資材		フック(4)、へら(4)、材料(3)、ペダル(2)、飾りつけ(1)、タイヤ(1)、ブロック(1)、板(1)、ねじ(1)	9	ねじ(5)、ラップ(1)、飾り(1)、車輪(1)	4
衣料		座布団(4)、スカート(3)、襟(1)、ベッド(1)、服(1)	5	ポケット(1)	1
食料		ビール(21)、揚げパン(13)、ギョウザ(10)、菓子(8)、弁当(5)、唐揚げ(4)、アイスクリーム(4)、ケーキ(4)、ハイボール(4) など	47	アイスクリーム(20)、菓子(10)、すし(6)、おにぎり(5)、餃子(5)、さつま揚げ(4)、揚げパン(4)、ドーナツ(3)、チョコレート(3)、ハム(3) など	28
住居		会議室(7)、椅子(6)、部屋(5)、家(3)、テーブル(2)、シート(1)、階段(1)、扉(1)、フロア(1)、窓(1) など	12	椅子(1)、家(1)	2
道具		猪口(12)、グラス(5)、駒(5)、皿(5)、茶わん(3)、パンフレット(3)、袋(2)、羽(2)、瓶(2) など	23	皿(9)、駒(8)、茶わん(6)、おもちゃ(2)、バイオリン(2)、石鹸(2)、コップ(1)、箸(1)、ボウル(1) など	14
機械		カメラ(2)、レコーダー(1)、懐中電灯(1)、ロケット(1)、スクリーン(1)、携帯(1)、パソコン(1) など	7	カメラ(2)、老眼鏡(1)	2
土地利用		空港(2)、駐車場(1)、通り(1)	3	トンネル(1)、空港(1)	2
自然物および自然現象	自然	輝き(1)、映像(1)	2		0
	物質		0	石(1)	1
	天地	山(3)、島(2)、星(2)、谷(1)	4		0
	植物	梨(8)、トマト(7)、柿(2)、里芋(2)、人参(2)、にんにく(1)、大根(1)、栗(1)、みかん(1)	9	芽(5)、みかん(5)、空豆(4)、里芋(4)、人参(2)、さくらんぼ(1)、トマト(1)、梨(1)、りんご(1)、わかめ(1)	10
	動物	ウナギ(1)	1	ムール貝(1)	1
	身体	卵(7)、顔(2)、付けまつ毛(1)、手(1)	4	卵(12)	1
	生命	命(2)	1		0

表2を見ると、<つ>の対象名詞は「抽象的關係」から「自然物および自然現象」まで満遍なく分布しているが、一方で<個>の対象名詞は、「生産物」「自然物および自然現象」に偏っていることがわかる。<個>の対象名詞で「生産物」「自然物および自然現象」に分類されているのは、表2に示す通り具体物である。つまり、日常会話において<つ>は抽象物から具体物まで幅広く使用されるが、<個>の対象名詞は具体物に偏っていると言える。この傾向は、新聞記事の用例を分析した飯田（1999）、陶（2009）で示された、<つ>の対象名詞は抽象物に偏り、<個>の対象名詞は具体物に偏るという傾向とは異なるものである。

このように、日常会話において<個>は具体物を数える際に使用されることが多いことが示されたが、一方で、Shimojo（1997）、伊藤（2015）で指摘されたような抽象物に使用される例も見られる。

(5) は「事」、(6) は「サークル」、(7) は「文章」が<個>を用いて数えられている例である。

(5) 望月, ちよっとだけ 報告すんの忘れてた事が二個ありまして。(T009_008b)

(6) 青木, サークル 七個ぐらい掛け持ちしてるやつっすよね。(T006_004)

(7) 聡太郎, 個人ラインで なんか めちゃくちゃ長い文章が なんか五個も七個も来たから…

(K004_020)

また、<個>の対象名詞が抽象物であるもののうち、「差」には、他の対象名詞とは異なる特徴が見られた。本研究で対象名詞を「差」としたのは、(8) のような、年齢や学年の差を表す例である。

(8) 小川, じゃ 二個上だ。じゃ 米山と一緒に。(T008_013)

<つ>の場合は、(8) と同じく (9) のように年齢や学年の差を表す際に使用することができるが、(10) のように年齢そのものを表す際にも使用することができる。

(9) 准, お前 俺の三つ下だもん。(T010_003)

(10) 静香, 卓球の愛ちゃん。 四つぐらいん時から かーってやるけど… (S001_015)

<個>は、年齢そのものを表す際には使用することはできないため、(10) の「四つ」を「四個」と言い換えると非文となる。本研究では、「年齢そのもの」が対象名詞である例と、「年齢や学年の差」が対象名詞である例とを別の用法として区別している。そして、前者の場合は対象名詞を「年齢」とし、『分類語彙表』の「抽象的關係-量」に分類し、後者の場合は対象名詞を「差」とし、『分類語彙表』の「抽象的關係-様相」に分類している。

今回収集した用例の中で、<個>の対象名詞の異なり語数は109であったが、そのうち度数10以上の名詞は「アイスクリーム (度数20)」、「卵 (度数12)」、「差 (度数11)」、「菓子 (10)」の四つのみであった。このうち、抽象物であるのは「差」のみである。

また、抽象物が分類される「抽象的關係」「人間活動の主体」「人間活動-精神および行為」の部門の対象名詞のうち、「差」以外の度数2以上の名詞（事、点、三角形、桁、授業、アトラクション、文章、項目、ツアー）は、一つの会話の中で、基本的には同一の話者によって繰り返し使用されてい

るのに対し、「差」については九つの異なる会話において、12人の異なる話者によって使用されている。

年齢や学年の差を表す<個>の用法については、松本（松本1991：92），飯田（1999：393）に言及があるが、このような用法は、若い話者の間にのみ見られ、共起する数詞は一から三のような小さい数詞に限られるという特徴を持つ例外的な用法であるとされている。しかし、今回収集した用例では、このような<個>の用法は（11）から（14）に示すように、20代から60代の幅広い年代で使用されており、また共起する数詞も小さい数詞に限らなかった。

(11) 雪室, 二個下の後輩から 何人 八人くらいからもてた。(話者：20代男性) (T015_006)

(12) 彩香, 奥さん わたしの四個下。(話者：30代女性) (T008_013)

(13) 理代子, あたしの五個下ぐらいかな。で 彼女もなんかご縁があって…

(話者：40代女性) (K008_016)

(14) 紀子, パパより上の人?

指田, 一個か二個ぐらいじゃないかな?(話者：60代男性)

(T023_013)

そのため、現在においては、このような用法は例外的なものではなく、<個>の主要な用法の一つとして定着していると考えられる。

5. まとめ

本研究では、CEJCから収集した<つ><個>の用例について、それぞれの助数詞の対象名詞を『分類語彙表』を用いて分類を行い、その使用の傾向を分析した。その結果、<つ>は抽象物から具体物まで幅広い対象に用いられるが、<個>はその使用が具体物に偏ることが明らかになった。これは、新聞記事に現れる<つ><個>の使用とは異なる傾向を示している。また、年齢や学年の差を示す<個>の用法は、松本（1990），飯田（1999）では例外的な使用として扱われていたが、現在では、<個>の主要な用法の一つとして定着していることも示した。このような<個>の用法の定着過程を明らかにすることとその方法については、今後の課題としたい。

参考文献

飯田朝子（1999）「日本語主要助数詞の意味と用法」博士論文， 東京大学。

伊藤由貴（2015）「近代を中心とした助数詞の通時的研究」博士論文， 大阪大学。

国立国語研究所（2004）『分類語彙表-増補改訂版』東京：大日本図書。

陶萍（2012）「助数詞に見る意味分野別語彙構造－「一つ」と「一個」との比較を通して－」『論究日本文学』96：29-42。

松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造の体系－原型意味論による分析－」『言語研究』99：82-106。

Shimojo, Mitsuaki (1997) The role of the general category in the maintenance of numeral classifier systems: The case of tsu and ko in Japanese. *Linguistics* 35(4): 705-733.